

SAGA ART BRUT NETWORK

平成30年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

はじめに

あるケーキ店に、障害のある方が描いた絵を用いてドイツのデザイナーが制作した棚が設置されました。

ある自治体のふるさと納税の返礼品に、障害のある方が地元の祭り（面浮立）を描いた絵を載せたトートバックとＴシャツが採用されました。

ある乳幼児向けの食器を扱う企業より、障害のある方が描いた絵を自社製品にしたいというオファーがきました。

これらは、今年度の佐賀県内におけるいくつかの出来事です。

佐賀県文化課による「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」の受託団体として、当法人では「Saga ArtBrut Network Center (SANC)」での相談活動をはじめ、佐賀県下における障害のある方たちの芸術文化活動を推進していくためのプログラムに取り組んできました。

ここまでの数年間、障害のある方たちが芸術文化活動に取り組むことができる環境や、障害のある方たちが生み出す作品に多くの方に触れてもらうための環境を作ることには力を入れてきました。これらの活動を通じて、県内でも多くの作品が生まれ、または新しく見出され、それらの作品が持つ独創性やストレートな表現力、柔らかさ、温かさなどが知られてきたことで、冒頭のような出来事が起きてきたのだと思います。

障害のあるご本人やその作品が、普段は障害と関わることのない人たちとつながり、そこに新しい出会いや物語が生まれることは、とても素敵なことですし、そこには経済的な生産性という一面的な価値だけではなく、「豊かさ」があるように思います。

佐賀でも出会いや物語が生まれ始めました。

芸術文化活動を通して、障害のある人もない人も、誰もが地域社会のなかで「豊かさ」を感じながら生きていくことにつながることを願っています。

社会福祉法人はる 理事長
福島 龍三郎

ご挨拶

自分が感じたものをありのままに表現し、既存の枠にとらわれない豊かな創造性。

多くの人々が行き交う日常のシーンに、それはありました。

心で感じ、純粋に表現したものを、Tシャツをキャンバスにして飾った作品。それは、色鮮やかであり、または抽象的であり、もしくは日常のワンシーンを切り取った構図として、人々が行き交う日常の中にありました。多くの人々が足を止め、表現していることを感じ取っていました。

障がいのある人が、様々な表現活動を通して、様々な人たちと出会い、一人ひとりの魅力や才能が認められ、社会と繋がること。そして、広がっていくこと。

佐賀で、そのような社会の実現に向けた取り組みが広がりつつあります。

「Saga ArtBrut Network Center (SANC)」では、これまで培われた経験やノウハウをもとに、相談支援や人材育成はもとより、障がいのある人の文化芸術活動のさらなる広がりや、行政では担うことができない現場の実情に応じたきめ細かな支援を行っていただきました。

これらの活動を通して、人が表現することの無限の可能性を伝えるとともに、人と人が繋がり、人の想いに寄り添う社会が実現できるよう、一層の発展を期待しています。

佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業にご尽力された社会福祉法人はるの皆様、また、活動を支えてくださいました関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

県としても、引き続き障害のある人の文化芸術活動の支援を推進してまいりますので、今後とも、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

佐賀県文化・スポーツ交流局文化課
課長 橋口 泰史

目次

- 2 はじめに
- 3 ご挨拶
- 4 目次

Chapter 1 事業概要

- 6 障害者の芸術文化活動普及支援事業について
- 7 全国に広がる支援の拠点
- 8 SAGA ART BRUT NETWORK が目指すこと
社会的インパクト評価に基づいた事業計画
- 10 地域の現状と課題
- 12 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援センター
Saga ArtBrut Network Center (SANC)

Chapter 2 事業報告

- 14 平成 30 年度事業一覧
- 16 「障がいのある人の表現とは？」を考えるセミナー
- 18 たくさんの人に見て欲しい! ○○な展覧会を一緒に作りませんか?
- 20 グッズ化に必要なことを学びながら 作りたいものを作るためのセミナー
- 22 グッズ化サポート
- 24 がばいアーティストたち これ誰が描いたの?
- 28 「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」のCMを作ろう!
緊張と向き合うワークショップ
第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀
- 32 相談支援
- 33 アトリエ・サンク

Chapter 3 今年度の評価

- 35 アウトプット数値
- 36 参加者アンケートの満足度
- 38 協力委員会による評価コメント
- 42 成果と課題
- 44 情報発信資料

Chapter 1

事業概要

- ☐ 障害者の芸術文化活動普及支援事業について
- ☐ 全国に広がる支援の拠点
- ☐ SAGA ART BRUT NETWORK が目指すこと
社会的インパクト評価に基づいた事業計画
- ☐ 地域の現状と課題
- ☐ 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援センター
Saga ArtBrut Network Center (SANC)

障害者の芸術文化活動普及支援事業について

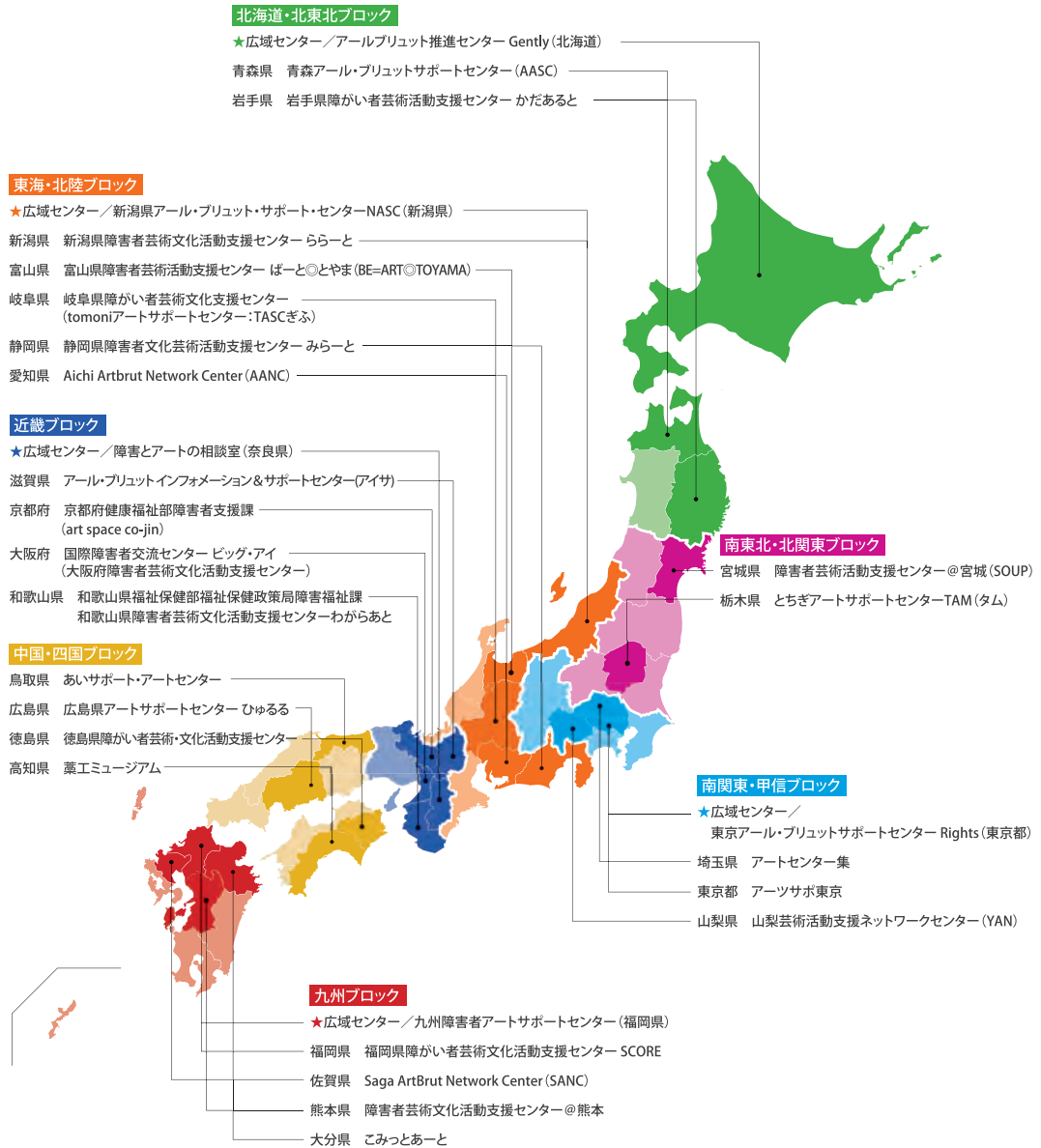
芸術活動は障害者にとって重要な社会活動の一つであり、近年では、既成の概念にとらわれないその芸術の特性が、国内外において一定の評価を受けるようになるなど、芸術活動を通じた障害者の社会参加の一層の促進が期待されています。

「障害者の芸術活動支援モデル事業」（平成 26~28 年度実施）で培った支援ノウハウを全国展開することにより、障害者の芸術文化活動（美術、演劇、音楽等）の更なる振興を図っています。

「都道府県」、「ブロック」、「全国」という 3 つの活動エリアを設け、それぞれのエリアに支援センター（24 都道府県）、広域センター（7 ブロック）、連携事務局（2 カ所）といった支援の拠点を設置し、2018（平成 30）年度は全国 26 の都道府県において 30 団体が事業を行っています。

都道府県の「障害者芸術文化活動支援センター」は、芸術文化活動を行う障害者本人やその家族、障害福祉サービス事業所、文化施設、支援団体等をサポートする拠点として活動しています。

全国に広がる支援の拠点



SAGA ART BRUT NETWORK が目指すこと

社会的インパクト評価に基づいた事業計画

アウトプットだけでなく、アウトカムを指標の一つとしながら事業の達成度を計ります。

アウトカム(成果)の“〈後期〉文化”を目指して、“〈初期〉環境” “〈中期〉普及”を積み上げて行きます。

		インプット	活動	アウトプット
1 事業概要	障がい者	・ヒト 支援者 アート専門家 ・モノ 施設/会場 機材 画材	・展覧会 ・ワークショップ ・ステージイベント ・相談 ・交流 ・調査・発掘の対象 ・アトリエ	・出展者数 ・会場数 ・相談数 ・相談の種類 ・発掘された作家の数
	支援者	・ヒト アート専門家 まちづくり 障がい福祉支援者 ・モノ 施設/会場 機材 画材	・ベシックスセミナー ・ワークショップ ・展示研修 ・グッズ化セミナー ・パフォーマンス ・相談 ・展覧会 ・ステージイベント	・出展者数 ・会場数 ・相談数 ・相談の種類 ・発掘された作家の数 ・研修の参加者数 ・関わった支援者数 ・グッズ化された件数
	一般	・ヒト 障がい者 障がい福祉支援者 ・モノ 施設/会場	・展覧会 ・ワークショップ ・パフォーマンスステージ	・来場者数 ・会場数 ・参加者数

障がいを持った方が芸術活動を通して豊かに暮らし
誰もが多様な文化を認める豊かな社会へ

アウトカム		
〈初期〉	〈中期〉	〈後期〉
環境(場所・人材)	普及(つながり・流通)	文化
・創作できる場所が増える ・発表の機会が増える ・アート活動に理解のある支援者が増える ・アート活動を通して表情が良くなる	・芸術活動の選択肢がある ・グッズ化の機会が増える ・展覧会に出展する機会が増える ・一般の方の認知を得る ・アート活動を通して自信を持つ	障がいを持った方が芸術活動を通して豊かに暮らし 誰もが多様な文化を認める豊かな社会へ
障がい者のアート活動に関する ・知識が広がる ・ネットワークが広がる ・抱える問題が見える ・障がい者とのコミュニケーション能力が向上 ・“表現”を楽しめる支援者が増える ・価値観が変わる	・発信するスキルが身につく ・グッズ化の支援スキルが身につく ・展覧会の開催スキルが身につく ・パフォーマンスの支援スキルが身につく ・障害者への支援スキルの向上 ・問題の解決及び実践できる ・地域で活動している団体や事業所と連携する ・発信力の高い支援者が増える	
・アートを楽しむ ・会場へ足を運ぶ ・障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れる	・お気に入りの作品や作者ができる ・グッズ化された商品を購入する ・展示会に足を運ぶ機会が増える ・障がい者のアート活動を通して、障害への理解が進む	

地域の現状と課題

これまで

実施地域の現状

佐賀県では、文化・スポーツに関する施策を総合的に推進していくための体制の充実と強化を図るため、平成（以下 H）24 年度に新たに文化・スポーツ部（現：文化・スポーツ交流局）が設置され、障害者の芸術・文化活動について、障害者施策担当部局ではなく、広く文化全般の施策を担っている文化・スポーツ交流局文化課で所管されている。

H24 年度の「第 12 回全国障害者芸術・文化祭さが大会」（バラエティ・アート・フェスタさが 2012）開催をきっかけとして、障害者の芸術・文化活動の支援をさらに強化・推進していくために、全国大会終了後も、佐賀県独自で毎年度、「バラエティ・アート・フェスタさが」が開催され、障害者の芸術・文化活動の裾野を広げるための取組が行われてきた。

また、アールブリュットについては、病院の協力のもと、県内ですでに 6 名の作家が発掘（佐賀県出身者及び県内の病院入院者）されるとともに、アール・ブリュット展が県立美術館・博物館を会場に開催されるなど、障害者による芸術・文化活動の動きが佐賀県内に広がりつつあるものの、障害者の芸術・文化活動をさらに充実させるためには、より地域

や現場の実態に沿った支援の在り方や施設間のネットワークを構築することが課題となっていた。

H27 年度および H29 年度には、佐賀県文化課により、県内の障害者サービス事業所、障害者（児）福祉関係団体、精神病院、特別支援学校を対象に「障害者支援事業所等における芸術活動についてのアンケート」が実施された。

アンケート結果の比較から見える現状と課題

H27 年度のアンケート結果では、芸術活動に取り組めない要因として「活動場所の確保」「指導者の確保」「支援方法の確立」に多くの回答が集まった。佐賀県内に手本となる事業所やモデルケースがないことから、どのように芸術活動を進めて良いかがわからないことがその要因と考え、当法人が受託した「平成 27 年度障害者の芸術活動支援モデル事業」（厚生労働省）などを通して、「裾野を広げる」「一歩目を踏み出す」をテーマに、初心者へのスタートアップを中心としたセミナーやコンサルテーション、視察を実施し、展覧会や情報交換会を通してネットワークを築きつつ、佐賀県の芸術活動の基盤を整えていった。

今年度

その結果、障害者の芸術活動について関心が「ある」とした事業所は、H27年の64カ所から、H29年には135カ所へと約2倍に増加している。また、芸術活動に関心がある事業所のうち、芸術活動を「行っている」とした事業所は、H27年の33カ所から、H29年には70カ所へと約2倍以上に増加している。この結果は障害者の芸術活動の裾野が着実に広がっていることを示していると言える。

「芸術活動における現在の課題」については、“芸術活動を行っていない事業所”では、H27年・H29年ともに「指導者確保」「活動時間確保」が上位2項目の課題であるのに対し、“芸術活動を行っている事業所”の上位2項目の課題は、H27年の「指導者確保」「活動時間確保」から、H29年には「指導者確保」「指導支援の方法」へと変化している。

「指導者の確保」と「活動時間の確保」という課題については、相談対応やモデルケースを参考にサポートを進めることができるようになったが、“芸術活動を行っている事業所”の課題が「活動時間確保」から「指導支援の方法」へと変化していることは、どうやって芸術活動に取り組んでいくか、環境を整えていくかという段階から、整えた環境での活動の“質”をより充実させるために、どうやってステップアップしていくかという新しい段階に来ていることを示している。

次のステップの一つとして、それぞれの事業所における作品や活動をどのように発信していくか、どのようにして発信力を高めていけるかが課題として考えられる。これまで深めてきた「なぜアートに取り組むのか?」という基本的な考え方を踏まえたうえで、これまでに蓄積してきた知識をベースに、新たにブランディングやマーケティング等の考え方も取り入れ、発信力を高めていくために必要なことを学べる研修に取り組み、地域や施設において芸術活動を牽引していき人材の育成が必要ではないと思われる。

また、芸術文化活動に取り組む人や事業所の裾野を広げることは、障がいのある方たちの芸術文化活動の普及、及び人材育成には欠かせないため、引き続き、裾野を広げるためのプログラムも継続して行うことも必要である。

佐賀県障害者芸術文化活動普及支援センター

Saga ArtBrut Network Center (SANC)

社会福祉法人はるは、2002（平成14）年に設立して以降、「障がいのある人や社会のすべての人たちが、一人ひとりかけがえのない人生の主人公として、その命が尊重され、生涯を通して地域とともに幸せに暮らしてもらうこと」という理念の下に、福祉支援サービスの創造と展開、整備を積み上げてきました。

子どもから大人まで仕事や活動を通して地域の方々と触れ合ったり協働したりすることで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域理解が深まることをめざした活動に力を入れています。

なかでも、“豊かさ”の一つとして、2015（平成27）年に「Saga ArtBrut Network Center」をスタート。芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援している方、関心のある方などを対象に、「相談」「セミナー」「展示会」「オープンアトリエ」「ワークショップ」などさまざまなプログラムを実施しています。



社会福祉法人 はる
Life Support HAL, SAGA

SANC
Saga ArtBrut Network Center

Chapter 2

事業報告

- ☐ 平成 30 年度事業一覧
- ☐ 障がいのある人の表現活動を考えるセミナー
- ☐ たくさんの人に見て欲しい!
○○な展覧会を一緒に作りませんか?
- ☐ グッズ化に必要なことを学びながら
作りたいものを作るためのセミナー
- ☐ グッズ化サポート
- ☐ がばいアーティストたち これ誰が描いたの?
- ☐ 「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」の CM を作ろう!
緊張と向き合うワークショップ
第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀
- ☐ 相談支援
- ☐ アトリエ・サンク

平成30年度事業一覧

ベーシックセミナー

「障がいのある方の
表現とは？」
を考えるセミナー

たくさんの人に見て欲しい！
〇〇な展覧会と一緒に
つくりませんか？

講師 柳 健司氏 美術家/佐賀大学芸術地域デザイン学部教授
花田 伸一氏 キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授

9 / 16

【講演】

「芸術活動に取り組むにあたって」

講師 樋口 龍二氏
特定非営利活動法人まる

【トークセッション】

「表現とは。
皆さんの身近にあるもの」

講師 原田 啓之氏
医療法人 清明会「PICFA(ピクファ)」
花田 伸一氏
キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授
小松原 修氏
ドラマディレクター/うれしの特別支援学校

グッズ化に必要なことを学びながら
作りたいものを作るためのセミナー

講師 原田 啓之氏 医療法人 清明会「PICFA(ピクファ)」
安永恵子氏 安永法律事務所

パフォーマンス
(スター発掘プロジェクト)

講師 小松原 修氏 うれしの特別支援学校/ドラマディレクター

相談対応

1

2 事業報告

3

10
/ 25第1回 実行委員会
テーマ/コンセプトを考えよう11
/ 29第2回 実行委員会
作品を持ち寄って見せ合おう1
/ 10第3回 実行委員会
展示方法を考えよう

展覧会

がばい
アーティストたち
これだれが描いたの?会期:平成31年2月19日～2月24日
会場:ゆめタウン佐賀 セントラルコート10
/ 12作るために必要なこと
売るために必要なこと
(コンセプト作り～マーケティング・ブランディング)11
/ 7創作活動にまつわる権利擁護
「所有権・著作権」
(ガイドラインに沿って作品規定を作ろう)12
/ 18

具体化するワークショップ

グッズ化サポート

障がいのある方の表現を
活かしたグッズ制作のサポート

デザイナー 伊藤友紀氏 HONOTA design

期間:平成30年12月～平成31年2月

9
/ 16「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」
のCMを作ろう!11
/ 11

緊張と向き合うワークショップ

11
/ 11

第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

パフォーマンス

個性・創造性・元気を兼ね備えた
パフォーマーは佐賀代表として

～雑多な音楽の祭典～

スタ☆タン 出場!

(※H31年度に開催延期)

アトリエ・サンク

「障がいのある人の表現とは？」 を考えるセミナー

芸術活動に取り組むにあたっての心構えと大切なこと

様々な立場で、障がいのある方の“表現”に向き合ってきた4名の講師を迎えました

人材育成

場所

著作権

支援者

学生

初心者

取り組んでいる方



描く、歌う、発する、動く・・・障がいのある方の表現に間近で接した時、彼らの行動をどのように汲み取っていけばよいでしょうか。

福祉の支援者として、アートやパフォーマンスに取り組む仲間として。

彼らと共に、楽しんで表現に取り組んでいくために必要な事とはどんなことでしょうか？

様々な立場で、障がいのある方の表現に向き合ってきた4名の講師と共に、私たちが表現に向き合い、活かしていくヒントに溢れた研修となりました。

ベーシックセミナーと題し、「障害のある方の表現とは？」を考える機会を、今年度の事業のスタートに据えました。参加者は、このセミナーを通して、自らが参加する今年度の人材育成プログラムを選択できるよう構成していました。

「展覧会」「グッズ化」「パフォーマンス」、それぞれの形で発信された“表現”は、どうしてそのようなアウトプットの形になったのか？ 障害のある方は何を望んでいたのか？ 支援者は何を発信したかったのか？

福祉の支援者として、アートやパフォーマンスに取り組む仲間として、障害のある方の“表現”にいかに関心するか、汲み取って行くか？

障がいのある方の表現を社会に対して発信していく時に欠くことのできない、プロデュースする視点とは？

障害のある方の“表現”への向き合い方を考え、深め、参加者が前のめりになる、そんなきっかけを狙いました。



参加者アンケートから

・アートと福祉の繋がりを知ることができた。アートと福祉がどう繋がっているのか疑問に思っていたが、作品を作ることによって感情を表現しやすくなるだけでなく、障害をもつ方にとって無理なく自己解決を行える場にもなると知った。とてもためになりました。

・障がい者の方々がアートをするのは「コミュニケーションのひとつで自己表現につながる」としか考えていなかった。展示会も「一般の方に障がい者のイメージを良いものにする」としか考えていなかった。しかし、プロデュースすることにより、本人の意欲につながるし、どのように動くかで障がい者の方々の魅力を引き出せると知った。アートをとり入れた支援を知ることができてよかった。

・鑑賞者、購入者側の立場で参りました。展覧会や物販の場に行くたび「この人のストーリーを知りたい」「作品の背景にあるものを知りたい」と思うことが多いのですが、その“want”に応えてくれる事業所さんがまだ少ないので、樋口さんの「プロデュースの責任」の話にとても共感しました。

・理解できない人、理解したくない人を巻きこむことは難しいけれど、理解の仕方が分からない人、理解してその先、どう関わればいいのか分からない人へ、ものを買う、何かを依頼する、参加するなど具体的な方法がもっと広報できればいいと思う。

・支援学校に勤めていて子どもたちの表現するものや人としての魅力を多くの人に知ってもらいたい。社会にでて（卒業後）も楽しい時間を過ごしてほしいと思っていました。その時に“アート”というものにとても興味がありました。今日は、佐賀でも活発に活動されている方々の話が聞け、とても力をもらった気がします。

・見せ方は大事だと感じた。真面目に伝えることも大切ですが、実例を通して（今日のように）伝えもらおうと、関心を持つきっかけになるし、自分ができることを知る手立てになった。良い機会でした。ありがとうございました。

・利用者さんの描いたものをグッズ化しようと考えながら1年以上が経ってしまいました。モチベーション上げるために今回また参加させていただきました。とても刺激になりました。長崎でもこういうセミナーや活動があればいいのと思います。これからも可能な限り参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

・アートを通した本人の支援、社会とつなぐ手段や企業とのコラボレーション等々、福祉の中では成功していると思います。私は、東京から引っ越して来たばかりなのですが、やはり、こちらで見るものにはあまりワクワクしません。彼らのアートの力を引き出す側の感性やスキルによって、作品自体の面白さが弱くなっていると思いました。ブランディングや、場は同じようにあるのに、プロモーションする側の目をもっと育てばいいと思います。

・“アートという媒介を通していいかに生活を豊かにするか”、“アートが目的ではなく「自分」をみせるためのアートをする”この2つのWordが自分の中にストンと落ちました。支援者としていくつものヒントをいただきました。ありがとうございました。

・福祉のことを知らずして、「+アートな活動」を知적障害者施設で行っています。たくさんのお話で参考にさせていただきたく参加しました。とても良い会をありがとうございました。

・子供が発達障害であるためアート活動についてもっと知りたいと思った。自分を表現出来る場所、方法が手助け出来ればと思いました。

DATA

平成30年9月16日(日)／メートブラザ（佐賀市）／43名

【講師】樋口龍二氏(NPO法人まる)／小松原修氏(うれしの特別支援学校／ドラマディレクター)／花田伸一氏(佐賀大学)／

原田啓之氏(医療法人晴明会 PICFA)

たくさんの人に見て欲しい！ 〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？

紹介したい作者・作品がある、発信スキルを展示を通して身に付けたい
障がいのある方のアートな仕草や振る舞いを何とかして伝えたい
既存の枠を超えて、より広く作品を届けたい、そんな思いを形にします

人材育成

つながり

作品を自慢する

思いを伝える

展示方法

初心者

取り組んでいる方



福祉関係者、アートが好きな方など9団体が集まり、実行委員会を組織。「展覧会のコンセプト作り」「作品の選定」「展示方法の検討」「実際の展示」などを重点的に検討しながら、アドバイザーの柳健司氏と花田伸一氏のサポートを受けながら組み立てていきました。

今回、事前にパブリックスペースが会場と決まっていたので、美術館やギャラリーとは展示が変わってくるのが予想されました。支援者として、障がいのある人に深く向き合い、その表現を汲み取っていくこと。福祉関係者として、一般の方への見せ方を考えていくこと。その上で、実行委員会

かに向き合うかということ。あれもこれも、と要素を詰め込みがちな議論に、アドバイザーが視点を整理しながらコンセプトの形が出来上がっていきます。

- ・福祉の発表会なのか？
- ・優れた作品の優れたって何だ？
- ・私たちがパブリックな空間で何を伝える？

観覧者に何を感じてもらい、何を持って帰ってもらうか。その上で、どう飾るかが生きてきます。実行委員の思いと、アドバイザーのプロの視点

が組み合わさって、展覧会が組み立てられていきました。

実行委員による振り返り

・どこにでもある、よく見る展覧会にしたくなかった。果たして作品はいきいきしていただろうか。実行委員が語る作家への熱い想いが一番心に残った。ゆめタウンをスクランブルする買い物客が普通に交差する風景がとても美しいと思った。どこにでもある、普通の風景がいい。

・実行委員というより作品を紹介した支援者という感じでほとんどはお任せとなり申し訳なかった。一枚の作品が見知らぬ人の目に触れる時、環境とのマッチングが重要とのアドバイスには目からウロコ。結果、質の高い展示会になったと思う。今回出展させてもらった作家も「生きる力に繋がった」と話しており感謝しかない。

・今回の展示はTシャツというカンバスの選択が良かったと思います。展示のレイアウトもよく考えられており、Artと福祉の主張のバランスもとれていたと思います。福祉についての理解も少しばかりではありますが深めることができました。この経験を生かして今後、Artと福祉の分野への積極的な参加を目指します。

・グッズ製作、販売をし、手にとっていただける体験をして初めて、他者評価が思ったより高い事に気づき驚いた。経験しなければ知る事もなかったと思う。展示スペースも、連日とても自然で良い雰囲気、偏見や思い込みがあるのはまず自分たちだと思った。ゆっくりじっくり経験し続けたい。

・「がばいアーティスト展」において最も印象深く感じたこと。それは、表現をすることにおいて「障害」というキーワードは不要だということである。作品をもって人々に感動を与えること。それを提供できるもののすべてが「アーティスト」であろう。

・最重度の知的障害ではコンテストへの出展は無理だろうと考えて、せめて実行委員会に参加してその手法を持ち帰って参考に、せいぜいよければオブザーバー参加なりとも考えていたのです。実行委員の皆様から背中を押されるように励まされ、マズローの自己実現レベルの社会参加を実現できました。感謝しかありません。

・会議を重ねる毎に、どんな展覧会になるんだろうと、ワクワクした気持ちでした。期待通りたくさんの方に、作品を見てもらえる事が出来ました。これが、私にとってアート支援の第1歩でありましたし、彼女にとってもアーティストとしての第1歩でした。このような機会を与えてくださった事に感謝しております。

・利用者の方も含め、ご家族の方が大変喜んでおられました。「自分の子供が描いた絵が、まさかTシャツになるなんて思ってもみなかったので、嬉しいです。ありがとうございます。」と笑顔で話されたのが、とても印象に残っています。

今まで、利用者の方が制作された作品を「形」として、表現ができていなかったのも、こういった展覧会に参加をさせていただいたことによって、表現の仕方をあらためて学ばせていただく機会になりました。また、ワークショップで来館者の方々に、ご自由に絵を描いてもらう企画は、とても面白かったです。素敵なTシャツになっていました。

・目の前の子どもたちの力を感じつつ、どのように表現する場を設定すればよいか分からず悩んでいたが、一人一人の作品が私一人では絶対考えつかない素敵な形となって展示され、買い物途中の多くの方が足をとめてくださっている様子を見ることができ、とても感動した。作家さんたちのエネルギーや感性を感じてくださっていることが伝わってきた。

展覧会「がばいアーティストたち」

P24

DATA

【第1回】平成30年10月25日(木) 【第2回】平成30年11月29日(木) 【第3回】平成31年1月10日(木)

【アドバイザー】柳健司氏(美術家/佐賀大学芸術地域デザイン学部教授)/花田伸一氏(キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

【参加団体】9組 【会場】アバンセ(美術工芸室)

グッズ化に必要なことを学びながら 作りたいものを作るためのセミナー

コンセプト作りやマーケティング・ブランディングの視点。著作権・所有権に作品取扱規程。
障がいのある方のアート活動の意義を深めながら、スキルアップを目指します。

人材育成

場所

著作権

コンセプト作り

ブランディング

支援者

取り組んでいる方



【第1回・第3回】障害のある方の“表現”が生まれる現場にいながらも、その活かし方がわからない、グッズを作ってみたものの思うように売れない、そんな課題を持った福祉関係者が参加しました。

商品を作るとき、作り手は売れるものを作ること
に一生懸命ですが、作ったものは売り切らないとい
けない。この発想はありますか。と原田さんは
語ります。物を作って売一般の企業として当
たり前のことを、当たり前を考えられているか。テ
クニック以前に、覚悟や日々の心構えが問われま
す。また、この商品は何を付加価値としていくの
か。アートやデザインに捕らわれるのではなく、福
祉のプロとして日々の支援から見出していく必要が

ある。主体は施設やスタッフではなく、利用者
と何ができるか、を考える視点を深めました。

【第2回】表現を発信していく過程で、作者や
作品の権利をどのように考え、守っていくのか。
安永弁護士の講義では、著作権や所有権の基礎
をイメージしながら、創作活動の現場に合わせて
ルールを組み立て、規約としてまとめていく作業を
実践しました。今年度から具体的に商品化を目指
したり、展示を実践する参加者が増え、これまで
より具体的な場面を想定できるようになりました。
規約自体が「難しい」ものから「必要」なものへ
と進歩したことを実感しました。



参加者アンケートから

【第1回】作るために必要なこと、売るために必要なこと

・グッズを売る事に関して商品を作る、デザインをよくする事ばかりに視点をおくのではなく、利用者のことを考えて支援することが大切だと改めて学んだ気がします。人脈も大切だと思ったので、これから頑張ります!!

・自分から行動しないと何も変わらないと思った。自分の中で「福祉だから・・・」と思って自分から一般企業とかと壁をつくっていると気づくことができた。それでは、利用者様の付加価値を下げることもなるとも思った。考え方が変わり視野が広がった。

・保護者としてやや不安に感じていた卒後（現在高3）が楽しみになりました。親としてはもっともつと子どもにも希望と夢を思いはせたいです。

・とても勇気が出ました。

・私達自身に知識が無い為工賃工場は作業をしてもらう事ばかり考えていましたが、教材を切り替えて利用者の方と接する事も考え直さなければと反省させられました。ありがとうございました。

・アートの支援を結びつけ、支援に役立てる様になりたい。アート=作品=商品化ではなく支援する

ことで商品化、仕事になるようにしたいと思った。

・利用者さんの作品をグッズ化するのは本当に難しいものだと感じましたが、まずはやってみないと分からないというのも感じました。

・今まで福祉にたずさわる機会があまりなく、明るくも無かったためか堅いイメージがあったのですが、このようにアートをお仕事とした支援もあるのだと驚き、また大変興味深かったです。

【第2回】ガイドラインに沿って作品規定を作ろう

・規約を見ると難しいと感じていましたが、一つ一つの項目を教えていただくと、とても大切なことが書かれていると感じました。

・昨年に引き続き2度目の受講です。2回聞いてやっとイメージできるようになりました。

【第3回】作りたいものを作るためのワークショップ

・昔ながらの考えがある施設に勤めていて少しずつでも何か変化がある施設が増えていることを知り、今回勉強させてもらいたく参加しました。

本当に驚く事ばかりでしたがどこかで活かして行けるよう残された時間を頑張って見たいと思います。ありがとうございました。

・最終的には人間力がものを言う!!と感じました。まだ、まだ、頑張りが足りない実感、もっと勉強します。And 行動します。

「グッズ化」セミナー受講者の中から、3組の事業所・個人が、
次のステップ「グッズ化サポート」に取り組みました。



P22

DATA

【第1回】平成30年10月12日(金)／シアターシエマ／20名 【第2回】平成30年11月7日(水)／アバンセ／14名

【第3回】平成30年12月18日(火)／アバンセ／6名

【講師】[第1回・第3回] 原田啓之氏(医療法人晴明会 PICFA)／[第2回] 安永恵子氏(安永法律事務所)

グッズ化に必要なことを学びながら 作りたいものを作るためのセミナー グッズ化サポート

デザイナーとの協働を通して、
障がいのある方の“表現”を活かしたグッズ制作の過程を学んでいきます。

人材育成

コンセプト作り

ブランディング

支援者

取り組んでいる方

コラボレーション



インターネットサービス等の普及により“モノ”にすることのハードルは年々低くなってきています。だからこそ、障がいのある方の“表現”のグッズ化を通して「何を指すのか?」という点が大切になります。事業所外部の視点を通すことで、大切なことが見えてくることがあります。デザイナーによるサポートとデザイン費用の助成を行い、出来上がったグッズは、展覧会「がばいアーティストたち」にて展示・販売を行いました。

実施時期として、グッズ化のセミナーが終了した12月にスタートし、2月下旬の販売機会が一つの区切りとなります。短期間での構成として、今回は考え方の整理、何のためにやるのか?を掘り下げて、そこから商品化につなげるとどんな物になる

のか。の流れを体験し、次年度時間をかけて挑戦してもらおうきっかけとします。

現地訪問、ヒアリング、ミーティングを重ねながら、事業所の中や福祉の価値観で完結していた思考を伊藤さんが紐解いていきます。見た目やデザインが判断基準であった事業所としては、より深く支援や事業所を掘り下げられ、視点の転換や、言語化を行なっていきます。

「福祉バザーでしか売れない」「制作の全行程を事業所内で行う」「売れないから格安で販売する」などを、どう発想を変えていけば良いかを学べるヒントとなっています。

「グッズ化サポート」を振り返って

今回、3つの事業所（うち1つは個人の方）のアートをグッズ化するサポートをデザイナーとしてさせていただきました。

デザイナーとして各担当者さんとやりとりして感じたのは、まず、それぞれに「デザイナー」がどんな仕事をする人なのか、の視点が全く違うということでした。ただ制作や作業をする人なのか、コンセプトの部分から一緒に意見をぶつけながら考え、共創していくのか。依頼側の考え方によって、デザイナーとしても、動きや、できることが全く違うということを強く感じました。

おそらく、本気でグッズを販売したり、しっかりとしたブランディングをしていこうとする場合外部デザイナーとの関わり方はとても重要になってくると思います。まず、パートナーとして「共にいいも

のを作ろう」という姿勢を保つこと。また、デザイナーの役割は、形をきれいに見せるだけではなく、モノの本質・魅力を外部のフラットな視点で取り出して見せることなので、そこを理解して、それぞれの事業所さんが自分たちに合うデザイナーを探し、コミュニケーションを密にとって物作りをしていくことが、成功の鍵になるのではないかと、この事業の中で改めて気づくことができました。

最後になりましたが、改めて、グッズ化サポートにチャレンジしてくださった事業所の皆様、SANCのお二人、関わってくださった皆様。たくさんのご協力、本当にありがとうございました。

「グッズ化サポート」監修
伊藤友紀（HONOTA Design）

グッズ製作の過程を学ぶことから生まれたオリジナルグッズ

fucO:



【fucO:】（佐賀市）
制作：マグカップ／ポスター

Nijirolabo



【nijirolabo】（鹿島市）
制作：トートバッグ／Tシャツ

いとよう
いともよう



【いとよう】（唐津市）
制作：バッグ5種（トートバッグ等）

展覧会「がばいアーティストたち」会場にて販売

P24

DATA

【参加団体】fucO:（佐賀市）／にじいろラボ（鹿島市）／フレンドハウス（唐津市）

【デザイナー】伊藤友紀氏（HONOTA design） 【期間】平成30年12月～平成31年2月

がばいアーティストたち これ誰が描いたの？

アートとしか言いようの無いものをTシャツにしてみました

「〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？」に参加した実行委員会により形になった展覧会。
県内外14名の「がばいアーティストたち」の作品を、Tシャツをキャンバスにして展示します。
県内最大規模のショッピングモール「ゆめタウン佐賀」のセントラルコートにて開催。

人材育成

つながり

流通

発掘

展示方法

佐賀県の作家

思いを伝える

がばい
アーティストたち
これだれが描いたの？

Gabai Artists

ゆめタウン
佐賀
セントラルコート

2019年

2月19日(火)

2月24日(日)

ゆめタウン佐賀 1階
セントラルコート



がばいアーティストたち、がばくない風景

本展実行委員会の皆さんや社会福祉法人はる／SANCのスタッフさんと話し合いを重ねながら、このたびの展示に漕ぎつきました。発表場所と会期は最初に決まっていたので、その条件を最大限活かせるような展示方法についてあれこれ話し合いました。

展示にあたり大事にした点が大きく二つあります。一つは、賑やかな商業施設での展示ということから今回は周囲との異化作用よりも同化作用を重んじました。つまり周りから切り離して目立つように見せるのではなく、周りの空間に馴染ませ自然に見えるように心がけました。これらの作品群が、ひいては作者たちが、日常から切り離されて特別に存在するのではなく日常の中に溶け込んで当たり前存在している風景を作りたいからでした。

もう一つは、お客さんが作品を見るときに言葉から入るのではなく感覚から入ってもらよう心がけました。つまり先に説明を読んで頭で理解してから作品を見てもらうのではなく、まず先に作品や空間を感覚から味わってもらい、そこで関心を持った方には説明を読んでもらうという流れにしました。これらの作品群が、ひいては作者たちが、先入観や偏見をもって見られるのを避けたかったからです。

今回のような取り組みがこれからも日常的に継続され、ごくごく当たり前の風景になっていくことを願っています。

「がばいアーティストたち」展アドバイザー

柳健司（美術家／佐賀大学芸術地域デザイン学部教授）

花田伸一（キュレーター／佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）





参加者アンケートから

・障がいなく関係なく素敵な作品、素敵な空間や演出に感動しました！

・感性が豊かです。同じ障害をもっているのが楽しかったし、うれしかったです。

・自分の感性に合うアーティストと出会えたことが良かったです。

・こういった発表の場があること。自分の作ったものがグッズになること。それを手にして喜ぶ人がたくさんいること。毎日のエネルギーになると感じました。

・アーティストの方は人生が絵に投影されていて深みを感じさせられました。皆さんの作品が見れて本当に良かったです。ありがとうございました。

・とてもパワーと元気をもらえました。ぼ〜っと座ってみたい空間でした。ありがとうございました。

・とてもステキでした。どう活かすかでこんなにも映えるものだと思えました。たくさん命をふきこんで下さり、有難うございます。とても良かったです!!

・バックデザインにした方が映えるデザインもたくさんあった。独特な色づかいがおもしろさやアートだと感じた。いい才能だと思った。表現することは才能だと思う。

・どの作品も、個性豊かで、また見たいと思いました。パンフレットたての段ボールがおもしろい!!

・Tシャツを買いいたい!!!

・とてもいい機会だと思い、ニュースを見てすぐに来ました。ぜひまた、開いてほしい。

・Tシャツの利用なんて、ただ着れば良いと思っていましたが作品を見て感動しましたいろいろな絵があって良かったと思います

・とても良い機会を与えてもらいありがとうございました♡また、是非いろいろな事に参加させていただけると嬉しいです!

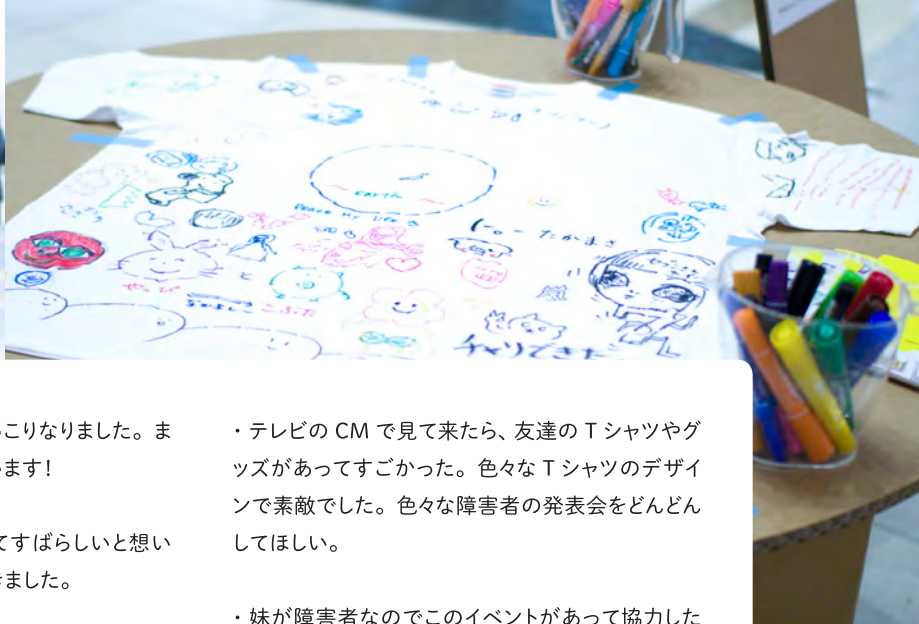
・佐賀で初のこういったTシャツの展示販売のイベントで素晴らしいと思います。来年度の研修の中には是非やまなみ工房の山下さんの取り組みや考え方、接し方等の講演をお願いします。

・空間に自然にマッチしていて、とてもステキでした。

・すばらしい作品ばかりで、どれにするか悩みました。もっと一般の人たちアピールできたらいいと思います。頑張ってください。

・すっきりといい展示になっていると思う。まずは、スタートとしてよいイベントになったのではないのでしょうか。ぜひ今後につなげて下さい。





・すてきな絵にふれて、心がほっこりになりました。またすてきな作品を楽しみにしています！

・皆んな、それぞれ個性が出てすばらしいと思います。楽しんでみさせていただきました。

・今年オーストラリアに行った時、街中に多くの車いすの方がいました。フツーに！それはきっと、街かつその方達にやさしく作られているところが多いためかと思いました。日本も、皆さんが普通に生活できる空間がふえれば良いと思っています。

・キャッチーな文章があると楽しいかもしれませんね。「あなたの心がゆさぶられたのはどの絵ですか?」とか...

・作品のすごさに圧倒されました！

・とてもすてきな企画ですね!! ぜひ九州各県をまわって欲しいです。ふくがよかった。

・テレビのCMで見て来たら、友達のTシャツやグッズがあってすごかった。色々なTシャツのデザインで素敵でした。色々な障害者の発表会をどんどんしてほしい。

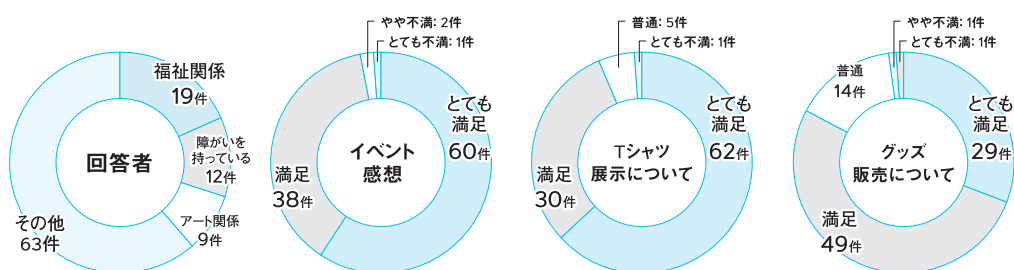
・妹が障害者なのでこのイベントがあって協力したいと思っている。妹も助けてもらっているので！

・たくさんのデザインがあっておもしろかった!感性がすばらしいですね。

・もっとこういう場所、機会があればいいと思う。知っている方がいて、見に来たのがきかけ。見ていて楽しかったし、おもしろかったです。

・このような機会がもっと増えて多くの人に観てもらいたい。

・みているだけで心がホッコリする♡もっとPRできたらいい



アンケート有効回答数：103件 / 来館者数：168,359人 (※ゆめタウン佐賀調べ)





「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」のCMを作ろう!



「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」 のCMを作ろう!

「スター発掘プロジェクト」の宣伝に協力してくださる方、CM作りって面白そう!! って思ってもらえる方、初めてのことに挑戦したいって思っている方、そんな方々の笑顔を集めて、素敵なCMを製作します。

緊張と向き合うワークショップ

第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

歌う! 踊る! 奏でる! 演じる!

パフォーマーと観客が一体となって表現を楽しむ 自由なステージ!

障がいがあってもなくても、人前でパフォーマンスして 楽しませたい人、集合!

人材育成

場所

誰でもOK

自慢の一芸

心から湧き上がる表現

自信を持って

支援者も表現者

「緊張と向き合うワークショップ」





「スター発掘プロジェクト」を振り返って

11月のプロジェクト参加者募集のために、従来のチラシだけでなくCM映像での広報にも挑戦したこと、さらにCM制作自体をイベントにして、目的であるプロジェクトの趣旨を広報していったことは大きな成果だったと思う。

ただ、その取組の割には、本番の参加者は思ったより少なかった。CMを使って情報を拡散させることへの課題と、障害当事者に届いたのか、届いたとしても参加したいと思えるような情報の出し方だったのかという課題があった。

また、日程的に秋のイベントが目白押しだったこともあり、プロジェクトが11月に一回きりしかなく、おまけに佐賀市でしか開催しないというのも、県内からパフォーマーを発掘するには条件が限定されすぎていた。ある程度主要な地域で開催するということ、本来なら毎月どこかで必ず開催しているというくらいしていないと認知度は上がらないかなと感じている。

イベントの内容であるが、障害者と支援者、障害者単独、アイドル（健常者）、コンテンポラリーダンサー（健常者）、障害児親子など参加者のカテゴリーが多様であったこと、ジャンルも歌あり、演奏あり、ダンスありと多彩であったことは成果だと思う。

ただ、このプロジェクトで重要なのは、障害のある人たちの中からスターを発掘することだと思う。もっと多くの障害者にエントリーしてもらい、「この人の表現に魅了された」というような存在感抜群の障害者パフォーマーを探し出すようにすることが大きな課題だと感じる。また今後の展望として、即興表現だけに捉われず、練習を重ねて舞台作品を作り上げていくことも一方で考えていきたい。

「スター発掘プロジェクト」講師

小松原 修

（うれしの特別支援学校／ドラマディレクター）





「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」のCMを作ろう!

「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」
プロモーションムービー 〈前編〉



〈前編〉



〈後編〉

「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」
ショートムービー



「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」





✎ 参加者アンケートから

【CMを作ろう!】

・知らない人との関わりで緊張したけれど、一緒に踊ったり話せたりしたり出来て、楽しかったし、学校や地元以外の繋がりが出来たようで嬉しかった。ありがとうございました。

・こういうイベントは初めてだったので、すごく楽しかったです。今まで障がいの方々との接する事が無かったのですが、今後は、何かしらのお伝いができれば、したい!!

・みんな楽しそうでキラキラしていました

・大人数の前で歓声をあげると、てれくさいけど、うれしい気持ちがおおきいし、自信につながりいいと思った。

・体を動かす事は、すごく楽しかった。その方の個性やキャラクターに合った表現の場が増えるといいな!と思います。音楽隊とか楽しそうですね。どうでしょう。

【第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀】

・楽しいひとときをすごさせていただきました。こうした機会が少しずつ増えて障害をもった方も楽しめる日々が多くなると優しい社会になってくのではないかと感じました。ありがとうございました。

・これからもこういう企画を発信して下さい。

・深い絆を感じた1日でした。子ども達の輝きを求めてこれからも頑張ってくださいね。次回もよろしく・・・です♡

・障がいのある人たちをあたたく受け入れてある場の雰囲気が、すばらしかった!

・見ごたえがあった! そのうちフェスを!

・今回、皆さんの歌やダンスを見て、感動しました。表情が生き生きしてステキでした。まさか、自分も参加するとは思ってなくてビックリしましたが良い経験になりました。ありがとうございました。

DATA

【CMを作ろう!】平成30年9月16日(日)／メートブラザ／25名

【緊張と向き合うワークショップ／スター発掘プロジェクト】平成30年11月11日(日)／バルーンミュージアム／9組出演、30名参加

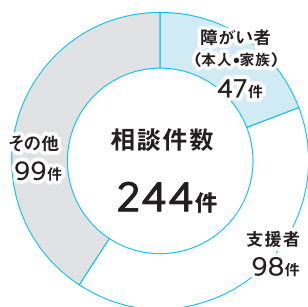
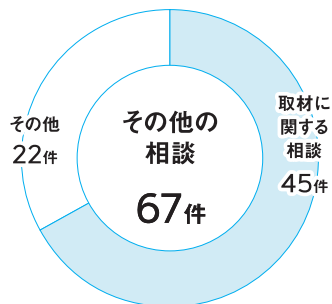
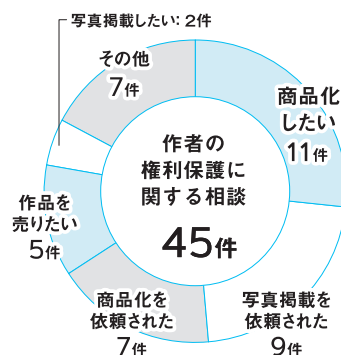
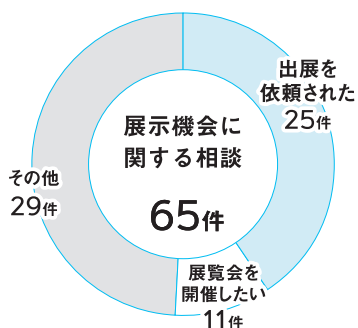
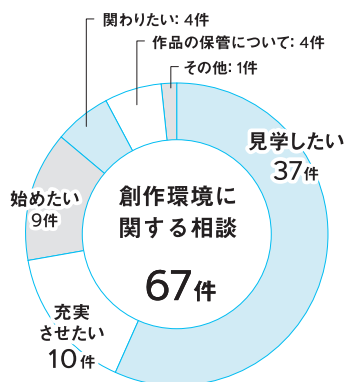
【講師】小松原修氏(うれしの特別支援学校/ドラマディレクター)



相談支援

相談対応を始めて4年が経ち、当初の芸術活動についての漠然とした相談から、展示や商品化・人材確保などについて、より具体的な内容が増えている。また、メディア掲載の増加等により見学に関する問い合わせも増えている。

人材育成	場所	つながり	初心者	取り組んでいる方	支援者
------	----	------	-----	----------	-----



【相談例】

創作環境に関する相談

- ・(「がばいアーティストたち」を見て) 何に取り組めるか相談したい。
- ・施設内での創作活動に行き詰まりを感じている。

展示機会に関する相談

- ・展覧会出展のため作者を紹介してほしい。
- ・展覧会を開きたいがどうすればいいかわからない。

作者の権利保護に関する相談

- ・作品の2次利用の際の、データ形式とサイズについて
- ・グッズ売上げの確定申告について

その他の相談

- ・九州の障がい者芸術の状況を知りたい。
- ・佐賀地域での独自の展開を知りたい。

アトリエ・サンク

障がいのある方が、気軽に芸術活動を行える拠点として、
芸術活動の支援・普及のネットワークを築く拠点としてのアトリエ・サンク。

人材育成

場所

つながり

初心者

取り組んでいる方

支援者

やってみる



アトリエ・サンクは、自宅や事業所等でなかなか芸術活動を行えない方や、普段のライフサイクルで芸術活動がむずかしい方、汚れる心配をせずに思いっきり絵の具で描きたい方などが、気軽に立ち寄れて、安心して芸術活動に取り組んで頂くためのスペースです。

障がいの有る無しに関わらず、気兼ねなく集い自由に創作活動ができる場として、月1回のアトリエ・フリーオープン日「ゆっつらアートDAY」（13回開催、101名の参加）を開催。絵の具（水彩・アクリル）、色鉛筆、クレヨン、毛筆、粘土、など各種画材の貸し出しも行なっています。

親子で創作に取り組まれたり、保護者さん同士のほっと一息の場としてもご利用いただきました。

また、お気に入りの道具を持参して作品展へ出品するためにアトリエに通う方、他県から障がい特性に合わせて落ち着いた環境を求めて来られる方、いつもとは違う環境で創作してみたいという方など利用のバリエーションも多岐に渡りました。

創作環境の見学や、団体での利用を希望されることもあり、障がい者の芸術活動の支援・普及の拠点としての役割も担っています。

DATA

【ゆっつらアートDAY】開催: 13回／利用:101名 【団体利用】開催: 1回／利用:23名

1

2

事業報告

3

Chapter 3

今年度の評価

- ☐ アウトプット数値
- ☐ 参加者アンケートの満足度
- ☐ 協力委員会による評価コメント
- ☐ 成果と課題

4年目を迎える中で、今年度の事業を振り返ります。

社会的インパクト評価に基づいて事業計画を立てた初年度として、協力委員会にて1年の評価を行います。社会や文化を作っていく事業として、長期的な視点を意識しつつ、目の前の課題を一つずつクリアしていきながら実践を積み重ねる様子を客観的に評価します。

評価材料	・アウトプット数値 ・参加者アンケート満足度 ・参加者アンケート自由記述
評価者	協力委員会

アウトプット数値

	項目	数値
障がい者	・出展者(展覧会)	14名
	・出演者(パフォーマンス)	5組(7名)
	・会場数	3会場
	・相談数	47件
	・相談の種類(上位5件)	①創作を始めたい ②見学したい ③創作環境を充実させたい ④商品化したい ⑤出展を依頼された
	・発掘された作家の数	9名
支援者	・出展をサポートした支援者数	7名
	・会場数	2会場
	・相談数	98件
	・相談の種類(上位5件)	①見学したい ②出展を依頼された ③作者・事業所への取材 ④商品化したい ⑤商品化を依頼された
	・発掘された作家の数	9名
	・研修の参加者数	92名
	・グッズ化された件数	3事業所／15種(バッグ:7／マグカップ:1／ポスター:1／Tシャツ:6)
一般	・来場者数	168,359人 ※ゆめタウン佐賀来館者数
	・会場数	2会場
	・出演者(パフォーマンス)	5組(8名)
	・相談数	99件
	・相談の種類(上位5件)	①展示機会 ②作者・事業所への取材 ③作品の2次利用 ④創作環境 充実させたい ⑤収支について
展覧会「がばいアーティストたち」 グッズ売上(販売期間: 2/19～2/24)		購入者数: 198人(延べ人数) 売上個数: 495点 売上総額: ¥566,000

参加者アンケートの満足度 アンケート回答の平均値を色分け

事業計画において設定した研修メニューの中で、参加者と研修内容のマッチングや意欲を点数で表す。環境を問う設問（～は広がっているか）は概ね赤色がつけられているが、普及を問う設問（スキルは身についているか）については自身を振り返り低めの青色となっている。

				セミナー	
		No.	評価項目	H30.9.16	
障がい者	環境	3	創作ができる場所が増えているか	4.13	
		4	作品を発表する機会が増えているか		
		5	アート活動に理解のある支援者が増えているか		
		6	アート活動を通して表情が良くなっているか		
	普及	7	アート活動の選択肢があるか	4.17	
		8	グッズ化の機会が増えたか		
		9	展覧会に出展する機会が増えたか		
		10	一般の方の認知を得ることができているか		
		11	アート活動を通して自信を持つことができたか		
支援者	環境	12	障がい者のアート活動に関する知識が広がっているか	3.67	
		13	障がい者の権利擁護に関する知識が広がっているか		
		14	障がい者のアート活動に関するネットワークが広がっているか	4.10	
		15	障がい者のアート活動を通して抱える問題が見えているか	3.30	
		16	障がい者とのコミュニケーション力が向上しているか	3.69	
		17	"表現"を楽しめる支援者が増えているか	3.57	
		18	障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れているか	3.97	
	普及	19	発信するスキルが身についているか	3.21	
		20	グッズ化の支援スキルが身についているか	2.93	
		21	展覧会の開催スキルが身についているか		
		22	パフォーマンスの支援スキルが身についているか		
		23	障がい者への支援スキルが向上しているか		
		24	障がい者の権利を守るスキルが身についているか		
		25	問題の解決および実践ができているか		
		26	地域で活動している団体や事業所と連携ができているか		
		27	発信力の高い支援者が増えているか		
	一般	環境	28	障がい者とのアートを楽しむことができているか	
			29	会場へ足を運んでいるか	
30			障がい者のアート活動を通して、価値観に変化が現れているか		
普及		31	お気に入りの作品や作者ができているか		
		32	グッズ化された商品を購入しているか		
		33	展示会に足を運ぶ機会が増えているか		
		34	障がい者のアート活動を通して、障害への理解が進んでいるか		

5段階評価のアンケートを各回に実施
(5:よく感じる／4:まあまあ感じる／3:どちらでもない／2:あまり感じない／1:感じない)

展覧会実行委員会			グッズ化セミナー			CM	スター発掘	展覧会	グッズ
H30.10.25	H30.11.29	H31.1.10	H30.10.12	H30.11.7	H30.12.18	H30.9.16	H30.11.11	H31.2.24	H31.2.24
3.89	3.63	3.29					3.90		
3.78	3.75	3.71	4.07	3.82	3.75	4.25	3.90		
3.44	3.50	3.71	3.64	3.55	3.75		4.10		
4.22	4.00	3.86	4.07	3.82	3.50		4.40		
3.44	3.71	3.57	3.29	3.00	3.25	4.00	3.70		
			3.86	3.82	3.50				
3.56	3.25	3.86							
3.11	3.63	3.43	3.07	3.55	3.25		3.40		
4.22	4.13	4	4.07	4.00	3.25		4.60		
3.75	4.00	4	3.71	3.55	3.25	4.00	3.60	4.75	4.42
3.50	3.50	3.71		3.36					
3.88	4.13	3.86	3.86	3.73	3.25	4.00	3.60		
3.63	3.88	3.57	3.50	3.27	3.25	-	3.40		
3.38	3.50	3.86	3.71	3.55	3.25	4.20	3.90		
3.75	3.88	3.57	3.64	3.55	3.25	4.50	3.70		
3.75	3.88	3.43	4.00	3.91	3.25	4.25	3.80	4.73	4.85
3.38	3.63	3.86	2.93	3.27	3.25	3.50	3.60		
			2.86		3.50				
2.88	3.50	3.43					3.70		
						3.00	3.60		
3.00	3.50	3.43	3.21	3.36	3.50				
				3.45					
2.88	3.50	3.29	3.00	3.27	3.00		3.70		
2.75	3.50	3.43	2.93	3.18	3.00		3.70		
							4.78	4.5	3.99
							3.00		
							4.44	4.28	4.36
							4.13		
							4.00		
							4.22	4.46	4.52

協力委員会による評価コメント

佐賀県において障がいと芸術文化に関わる各分野の方々（行政、弁護士、学芸員、大学教授、特別支援学校教員、報道機関、アーティスト、福祉事業者等）による協力委員会（12名）を設置し、広報への協力や事業への助言・評価を得た。

第3回協力委員会 評価コメント

（平成30年度3月19日開催）

【福島】“いともよう”についてグッズ化セミナーを経て、長年事業所で作っていた手縫いの布が、今回バッグになった。ゆめタウンでの販売によって、手縫いの価値がわかる人がご覧になった。グッズを見ながら、プロの目線で具体的なアドバイスもいただけた。また、事業所で製作した本人も様子を見にきた。ディスプレイされ商品となったグッズを見て照れ臭そうだった。やりがいや次の目標も生まれたようだ。

SANCを介さずに直接つながりが生まれたことは大きな成果。

【冨永】展覧会で販売機会を作ったこと、売れたことが良かった。

Tシャツだけの予定だったが、結果としてバッグ等バリエーションも増えた。実際に販売することで、それを通して意見が出てくる。

値段について、ブランドを作るということは、安売りしすぎると逆効果ともなりうる。ブランディングをして、価値を高めていいものを手に取っていただくということは、価格も重要になる。

作家の自信に対する配慮。様々な作家さんが並んで売られた。誰がいくつ売れたかが出る。数字

を見て売れなかった方が自信を失いかねない。ナリーブになる案件なので、丁寧に取り扱うべき。

Tシャツの展示について。原画に一番力がある。原画を見せる機会につなげて行くほうが良い。そうして作家プロデュースに繋がっていけば良い。

【小松原】福岡の委員の方より「佐賀なりのやり方、佐賀らしくていいですね」との意見をもらった。広報の方法について、CMを作って公募した割には少なかったと感じる。たくさんの応募の中から、佐賀代表として「スタ☆タン」に行きましょう、となれば良いと思う。

スター発掘プロジェクト自体は11月の佐賀で1回しか実施していない。数多く実施すること。各地で開催すること。日程と場所の分散をしていき、気軽に参加できる形を作ること。継続していく環境を増やしたい。

【角田】広報が課題だろう。パフォーマンスについて、福祉事業所への効果的なアプローチができれば。今年はテレビによる告知効果が感じられた。佐賀ではまだテレビの影響力が強い。

アートの技法についてのスキルアップ、画材や環境設定の工夫などを学べる機会があれば良い。

【竹下】原画に引っ張ることが大事だと思う。展覧会で気に入ってTシャツを買ってくれた人に対して、DM等を送ることで原画展へ繋げてはどうか。作家の絵を描くことへの不安に対するメンタルケア。支援者は目の前の作家の表現を肯定することが大切。

いろんな本を買うのは大変。美術館には過去の展覧会の図録が数多く保管されている。資料として活用してもらえれば協力できる。

展覧会について。福祉や障害者のバイアスのかかっていないお客さんが16万人いる。障害も何も関係なくただ好きかどうかでシャツを見ていた。アンケートは好きな方が答えるので必ずバイアスがかかる。アンケート結果以上に、現場のスタッフとして見てきた、お客さんのフレッシュな感想が貴重。

アンケートボードの設置はどうか。いろんな意見が集まりうる。事務局としての意見、作家への意見と分け、作家には肯定的な感想をピックアップして伝えるなどの配慮が必要。

【栗山】決まった技法を伝えることが必要な場面もあれば、一人一人の障害特性に合った画材や技法がオリジナルである必要性もある。技法をクリエイトするところまで踏み込めたら良いと思う。

見る側は分かりやすい表現を求める。そうじゃない魅力をどう伝えていけるか。展示を監修された美術家の柳先生や、キュレーターとしてたくさんの表現に触れてきた花田先生（佐賀大学）からアイデアをもらってはどうか。

【安永】講師としては、昨年よりも高度な内容の質問が増えていた。事業所や保護者等の立場の方がおり、参加者によって内容を変える必要を感じた。「CMを作ろう!」には子供と参加し、純粋に楽しか

った。特別支援学級のない学校に通う子供にとって、障害のある方と交流できる貴重な機会だった。アトリエについて、常設の展示・販売があると紹介ができて、広がりにつながる。

【馬場】今年から移動したので、研修参加者92名が多いのか少ないのか判断できないが、参加者数を伸ばす方向でいって欲しい。展覧会での56万円の売上と約500点の販売数は、障がい者の作品だったからではなく、ものが良かったから買われたのではないかな。継続する中ですごいアーティストが現れたらさらに広がる。

【上田（佐賀県文化課）】パフォーマンスについて、以前コンサルテーションをされていたように、福祉事業所や特別支援学校などに出向いて、パフォーマンスの機会を作るのはどうか。アウトリーチにより、イベント出演に対して恥ずかしいと感じるハードルを下げられるのではないかな。

SANC活動4年目で花が開いたのか、メディアに取り上げられる機会が増えた。メディアが目標ではないが、活動を知ってもらうことも一つ必要なこと。そうすると、関心が高まって参加する事業所も増えてくるはず。裾野を広げることも一つ大事な要素。ベーシックな研修も残しつつ、とんがったところもバランスよく実施することが大事。芸術活動に積極的な事業所とそうでない事業所の間に差に配慮することも必要。

相談の内容について、何が解決できて、何が解決できなかったのか。また、相談したことで相談者はどうなったかが追えたら良い。アート活動をしたいという相談に応えられるよう、紹介できる事業所のデータを集めて見える化をすると良い。

【上田 (SANC)】解決できないこと「佐賀の福祉事業所で毎日アートができる施設はどこか」まだまだ時間がかかる。

解決できたこと「商品化したい、展覧会出したい」これらについて、研修を案内することで解決に繋がった。また、SANC として回答できるスキルも身についてきている。

【冨永】作家の数だけ表現がある。障害のある方、美術家の先生、アーティスト。皆同じラインだと思う。アートに垣根は無い。アーティストコラボ、ライブペインティング、楽しいイベントがしたい。アーティスト、クリエイター、デザイナー、プロデューサー、ディレクター、そういった人がもっともっと医療福祉に関わっていくべきだと思う。つながりを作りたい。

【竹下】アートもいつか平面から立体へ入っていったら。筆や絵の具が苦手でも、粘土なんかが得意な方はいると思う。立体を生み出す過程でストレスを吐き出すこと。身体を使って作ることは身体表現に近い。佐賀には焼き物の土壌があり、粘土であれば他県よりも焼ける環境がある。簡単にはいかないが、次の可能性としては面白い。頭においておくと、いつか引かかる場面があるかもしれない。

【栗山】色や質感へのこだわりや、感覚を楽しむことが、立体の表現につながる。オリンピック・パラリンピックへの機運が高まっているが、この事業としてはオリパラをあえて意識しないほうが、障害あるなしに関わらずアートとしての可能性、楽しみを見出していけるのではないかな。結果として、本来のオリパラの理念に沿った文化・芸術が生み出され、佐賀らしさも発揮できるのではないかな。

【冨永】創ることが大事。技術ではない。障がいのある人たちの表現は尊い。壊されるべきではない。各地でワークショップなどを行っていて、作家として嫉妬するほど、すごいなって人はたくさんいる。障害なんて関係なく、僕は対等だと思っている。

最終的には障害のある人たちにとって、生きがいや仕事、お金など、生活に繋がればいいと思う。そういう方々を一番近くで見ている支援者の方をサポートするこの事業は素晴らしい。

このプロジェクトが盛り上がれば、佐賀のアートにも影響があると思うし、つながりたい。

【永尾】メディアとしては、展覧会や販売などがニュースなどで取材しやすく伝えやすい。さらに販売の金額があると反響を数字で示すことができる。今後はうまくメディアを使うことが必要になるのでは。その際、取材をしてもらうハードルは高くないと思うが、どのような情報を伝えてもらうかのコントロールも大切になる。

【重松】展覧会の来館者数が昨年比で約 1100 倍という人数はすごい成果だと思いました。次のステップとして、作品を見てもらうだけでなく、作者の方と知り合える機会があればいいな…と思います。例えば、障害者の方に限らず、広く一般の方も対象にした作品作りのワークショップなどがあれば、新しいコミュニティが生まれ、相互理解につながるのではないかと思います。

【藤田】参加者アンケートを見て、新しい発見、自信、勇気など、障害のある方、支援者の皆さん、一般参加者、それぞれが前向きな気持ちになれるような良い機会を提供いただけたんだなと思いました。

障害のある方、支援者の皆さん、一般参加者、それぞれの中で、アートに興味がある人、SANCを知っている人の輪が広がって、障害のあるなしにかかわらず交流できる場が多くの人に共有されるためには、地道に事業を継続していくことが大切なかなと思いました。

がばいアーティスト展では、直前の協力委員会で意見を踏まえて、作品の販売等も行っていただいたとのことで、今後は、さらにプロダクト製作の場としても事業が前進していくことで、さらなる発見や自信・勇気につながり、取組が加速するとよいなと期待しています。

【樋口】モデル事業から4年目となり、徐々に事業目的が明確になってきていると思います。また、アンケートや販売実績などのデータ集計をされているので、次年度に向けたプランをもっと明確化する必要があると思われます。

特に佐賀県の就労支援事業所は、県の施策の影響もあり、工賃向上に向けた取り組みが盛んに行われている中、芸術活動に取り組む、人材、時間、設備、知識などの前に、目的が見えないことで取り組む意識が芽生えていないという現状が見られます。

今年度、グッズ化についてのセミナーが開催されましたが、顧客向けの販売だけで考えるのではなく、企業や団体とのコラボ企画（商品だけでなく催事などでのアートパフォーマンス）や商取引に向けた仕事へつながる可能性を構築していくことも、当事者や支援者のモチベーションアップにつながっていくと思います。

本年度行なったアウトリーチをアウトカムだけではなく、支援者のスキルアップなどのインリーチの強化にも引き続き力を入れていく必要があると思われます。



第3回協力委員会

平成 30 年度 協力委員会	
氏名 (五十音順)	所属
栗山 裕至	佐賀大学教育学部幼少連携教育コース教授
小松原 修	ドラマディレクターうれしの特別支援学校
重松 恵梨子	シアターシエマ
角田 隆浩	障害者支援センター SAKURA
竹下 正博	佐賀県立美術館 (学芸員)
富永 ボンド	ボンダグラフィックス
永尾 友譜	株式会社サガテレビ
橋口 泰史	佐賀県文化課
樋口 龍二	特定非営利活動法人まる
福島 龍三郎	社会福祉法人はる
藤田 啓三	佐賀県障害福祉課
安永 恵子	安永法律事務所 (弁護士)
【第1回】平成30年8月7日(火) 【第2回】平成31年1月8日(火) 【第3回】平成31年3月19日(火) 【会場】シアターシエマ	

成果と課題

障害者の芸術活動支援モデル事業での活動を含め、4年目の事業となった。
「裾野を広げる・一歩目を踏み出す」をベースに、次のステップの一つとして、
作品や活動をどうやって“発信していくか”に取り組んだ。
取り組みの中で以下のような成果と課題が明らかになった。

	成果
総括	・「なぜアートに取り組むのか」をもとに「発信する」ことで何ができるか、考えるきっかけが作れた。 ・発信することの効果を実験できた。 ・TV・新聞等マスメディアで取り上げられたことによる裾野の広がり
展覧会	・昨年比約 1100 倍（144 名→ 168000 名 ※ゆめタウン佐賀 来館者数） ・パブリックスペースでの経験を積んだ。 ・「障害」「福祉」に頼らない発信ができた。 ・主体的な実行委員会ができた。
グッズ化	・「コンセプト・ブランディング」体験については良いステップで進められている。 ・販売機会では参加団体の予想を超える反響があり、企業からの作品利用依頼など、今後に繋がる動きも見られた。
パフォーマンス	・ 4 団体披露→ 9 団体披露 ・ 20 名参加→ 30 名参加 ・ 表現者・演目のカテゴリーが多種多様

	課題
総括	・ 舞台芸術よりも美術分野への偏り ・ アウトカムの分析、解釈
展覧会	・ “表現” に対する見方や価値観の変化を促し、よりクオリティが高い展示につなげる。 ・ 実行委員会の主導による企画・制作～実施
グッズ化	・ 顧客向けの販売だけを考えるのではなく、企業や団体とのコラボ企画も視野に ・ 挑戦するハードルの検証 ・ 技術面よりも福祉事業者の意識へのアプローチが必要
パフォーマンス	・ CM を作った効果が薄い ・ より多くの方に参加してもらうために定期開催の必要性 ・ 美術分野のように、支援者のスキルアップメニューの構築 ・ スターを発掘することが目標

サガテレビ ニュース



「スター発掘プロジェクト in 佐賀のCMを作ろう!」紹介 (H30.9)

かちかち Press・てれび宣伝隊



「スター発掘プロジェクト」告知出演 (H30.11)

かちかち Press「サガラボ」



アトリエとSANCの活動紹介 (H30.11)

サガテレビ ニュース



展覧会「がばいアーティストたち」紹介 (H31.2)

サガテレビ CM



展覧会「がばいアーティストたち」CM (H31.2)

情報誌広告：ビーフリー佐賀



展覧会「がばいアーティストたち」展 広告 (H31.2)

佐賀経済新聞 (web)



セミナー／SANC紹介 (H30.9)

Yahoo ニュース



展覧会「がばいアーティストたち」紹介 (H31.2)

佐賀経済新聞 (web)



展覧会「がばいアーティストたち」紹介 (H31.2)

県民だより「さががすき」



アトリエとSANCの活動紹介 (H30.7)

佐賀新聞



展覧会「がばいアーティストたち」紹介 (H31.2)

MOTEMOTE さが (情報誌)



展覧会「がばいアーティストたち」+ SANCの告知 (H31.2)



障がいのある人の芸術活動を支えるためのスキルアッププログラム(表)



障がいのある人の芸術活動を支えるためのスキルアッププログラム(裏)



「障がいのある人の表現とは」を考えるセミナー



たくさんの人に見て欲しい！
〇〇な展覧会を一緒に作りませんか？



グッズ化に必要なことを学びながら
作りたいものを作るためのセミナー



第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀



展覧会「がばいアーティストたち」



展覧会「がばいアーティストたち」図録



SANC ウェブサイト



SANC FACEBOOK



「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」
プロモーションムービー〈前編〉



「第2回 スター発掘プロジェクト in 佐賀」
プロモーションムービー〈後編〉



展覧会「がばいアーティストたち」サガテレビ CM





社会福祉法人はる

「私たちの願いは、障がいのある人たちが、自分の人生の主人公として、生涯を通して、地域とともに幸せに暮らしてもらうことです」という理念のもと、子どもから大人まで、生涯を通して地域で暮らすことができる体制を作ること、また、仕事や様々な活動を通して地域の方たちと触れ合ったり、協働することで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域の理解も深まる活動に力を入れています。

〈実施事業〉

- ☐ 生活介護事業所ライフサポートはる（定員 20 名）
- ☐ 就労継続支援 B 型事業所ワークスペースかん（定員 20 名）
- ☐ 居宅介護事業所ヘルパーステーションはる（行動援護・身体介護・家事援助）
- ☐ グループホーム（定員 31 名）
- ☐ ショートステイ（定員 6 名）
- ☐ 放課後等デイサービス事業所じゃんぶ（定員 10 名）
- ☐ 相談支援事業所ほっと
- ☐ Saga ArtBrut Network Center（SANC）
- ☐ 佐賀県強度行動障害支援者養成研修
- ☐ きてみんしゃいカフェ

SAGA ART BRUT NETWORK

平成 30 年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

〔企画・編集・発行〕

社会福祉法人はる

Saga ArtBrut Network Center（SANC）

〒849-0917 佐賀県佐賀市高木瀬町長瀬1168-1

Tel: 0952-37-7078 / FAX 0952-34-1024

Mail: halhal@life-hal.jp

Web(社会福祉法人はる): www.life-support-hal.net

Web(SANC): www.s-brut.net

〔発行責任者〕

福島 龍三郎（社会福祉法人はる 理事長）

〔構成〕

上田 諭（SANC）

〔デザイン〕

大石 哲也（SANC）

〔補助〕

平成 30 年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業